

岩元真明, 『ヴァン・モリヴァン——激動
のカンボジアを生きた建築家』 millegraph,
2025, 333p.

ヴァン・モリヴァンという名前は、近年とみに建築の分野で耳にする存在になってきた。本書の著者・岩元真明は、その流れをつくった人である。著者はホーチミン市の建築設計事務所で勤務した経験があり、東南アジアの都市・建築に興味を持った。ただ、そこで最も惹かれたのは、隣国カンボジアのモダニストであった。それくらい、モリヴァンの建築は突き抜けていたのである。このような、建築設計を主としてきた著者により、この書は上梓された。

モリヴァン自身はカンボジアの建築界、またカンボジア近現代史ですでに名の通った存在であったので、彼の作品・経歴を扱った書はこれまでいくつか出されていた。著者は、それら先行する研究を、文字通り隈なく目を通し、また関係者の元を渉猟して、この書をまとめ上げた。評者自身も彼のその活動を目にしたことがあるが、カンボジア人、フランス人問わず、どんどん相手の懐に飛び込んでいく行動力に、深く感じ入ったことがある。そうして出来上がった本書は、まさにモリヴァンに関する研究の決定版といっていい内容である。彼の個人的バックグラウンドから建築作品の詳細な読み解きまで、先行研究を踏まえた分析には刮目される思いがする。まさに、副題にあるように「激動のカンボジアを生きた建築家」の生涯が、その根差した国家の歩みとともに、迫真の勢いで伝わってくる。

本書は、植民地時代の保護国カンボジアの建築の状況から書き起こされる。フランスによる現地人利用の流れの中でも、仏領インドシナではベトナム人の登用が進んだ一方でカンボジア人にはそのような場は与えられず、フランス人・ベトナム人による二重の支配を受けた状況下であった。これは、独立後に世に出たモリヴァンにとっては、まさに身一つで舟を漕ぎ出す必要があったことを意味する。やがてパリに留学した彼は、カンボジア留学生のネットワークを構築するなど、早速その個性を発揮する。勉学の方も大きく成果を实ら

せて、歴史あるエコール・デ・ボザール（国立美術学校）を首席で卒業。帰国後の彼は、紆余曲折を経ながらも多くの国家的建築の設計を手掛けていくのである。本書では、これらの建築作品について、建設の背景や設計が詳細に分析されていく。

彼の初期の作品では、カンボジア住宅の屋根やアンコールの塔など伝統建築からの直接的なモチーフの引用が目立つ。これは抽象的デザインを標榜するモダニズムとしては教義に外れたことになるのだが、著者はこれをモリヴァンの創作における発展段階説を想定して説明する。つまり、彼のキャリアを大きく三つに分けて、折衷的デザイン、原理的・構成的な伝統解釈、気候適応と地場材料の活用、という「創作の三段階」を経ると述べる。実際、第二段階の作品にあたる国立劇場では、前段階では具象的だったクメール式塔が、四角錐の幾何学的造形へと変化している。そうして、代表作ナショナル・スポーツ・コンプレクスが出来上がる。古代クメール文明の復興を標榜してアンコール・ワットが参照されているが、もはや具体的・直接的なモチーフの引用は見られず、抽象的な構成原理を取り入れたデザインとなっている。それは、正方形平面と中心軸であり、これは今日のアンコール・ワットの建築史学上の理解と共通した見方である。すなわち、それまで別個に発達してきた、正方形を重ねていく階段状ピラミッド型の集中型プランと基軸線上に建物を配置する軸線型プランが、ひとつに融合したのがアンコール・ワットであった。古代建築に対するモリヴァンの優れた理解が存分に発揮されたといえよう。著者の分析によれば、この入れ子構造と軸線配置はモリヴァンの他の作品にも見られ、彼の設計の決まり手でもあった。その両者を融合したという点では、この作品はモリヴァン個人にとっても畢生のモニュメントであったといえよう。

ところが、これ以降、彼は国家的建築からは撤退し、個人事務所での活動が主となる。その背景について、著者はシハヌークとモリヴァンの目指すところの違いを示している。シハヌークは国家の繁栄を映した都市美の演出に執着し、モリヴァンは舞台装置をつくることに腐心してきた。しかし、その間にもプノンペンでは貧困層の拡大

が深刻化していた。彼は与えられた役割の中でその対応を図り、住宅の増産や後進の育成に取り組んだ。作品のカテゴリーが変わったことは、当然ながら建築デザインにも影響した。先の著者による分析では第三段階となるが、気候対応と地場材料の活用という点でローカルな風土に正面から取り組んだ。建築設計上の三段階は、本書では、建築家を取り巻く人脈の変化にも対応させており、単なる作品解説を超えた、モリヴァンの仕事の背景や人物像にも踏み込んだ深い分析へとつながったといえよう。

モリヴァンは建築設計以外にも、教育や政治・行政、またアンコール遺跡群の保存の仕組みづくりにと奔走した。いったい一人の人間が、これだけの仕事をこなすことがどうして可能だったのか。本書はその人物像を生き生きと描き出すことに成功したといえよう。それは、副題にあるように、「激動のカンボジアを生きた建築家」というイメージであった。ただ、このイメージを創出する陰で、捨象されたものもあったのではないかな。

本書であまり紹介されていないモリヴァンの仕事として、都市計画がある。都市計画の仕事は、本書のところどころでも出てきてはいるが、彼が都市計画に込めた思いはもっと強調されてもよかったのではないかな。首都プノンペンはもとより、シハヌーク・ヴィルのマスタープランも彼の手によるものである。特に後者は、国家元首の名を冠した全くの新都市であり、都市を一から創り上げるといふ、建築家としてはまたない仕事であったはずだ。60年代のモダニストにとっては、建築と都市とは連続した存在であり、都市計画こそ究極の目標であった。また、遺跡保存としてのアンコール公園・シュムリアップ計画もこの範疇に含めることができよう。これは、カンボジアの都市の現在・過去・未来の、それぞれを代表する都市を彼が総攬したことを意味する。モリヴァンとシハヌークが都市の創造者なら、クメール・ルージュは都市の否定を実行した。この2つの対比で描き出せるカンボジアの現代史もあり得るかもしれない。

都市への視線は、モリヴァンのもうひとつの大

きな仕事である研究・出版にもつながっていく。本書でも紹介されている *Modern Khmer Cities* (近代クメールの都市) に加え、*Les cités khmères anciennes* (古代クメールの都市) も著しており、都市史・都市計画についての彼の見識と知識をうかがい知ることができる。彼は、最晩年まで、プノンペンの都市計画について思索を巡らせていたという。やはりそこには、都市スケールだからこそ立ち上がる、彼ならではのイメージがあったのではないかな。

さて、著者があくまで追い求めていたモリヴァンの姿は、やはり建築家としての彼であった。建築家が誕生するためには、まずはその価値が、(個人にも社会にも) 理解されていなければならない。本書は、この原則に忠実に物語を描き出した。ただ、その余りに、建築家を一個の完結体として主体的に描きすぎてはいないだろうか。彼の作品は、すべてが彼の意志だけでできているわけではない。独立記念塔において、アンコール遺跡のひとつ、ヒンドゥ寺院のバンテアイ・スレイをモデルとすることは、シハヌークの指示であった。都市計画上の配置計画も、同じくシハヌークの決定であったという。シハヌークは、デザインについては自由な立場だったというが、彼もまたひとりのアーティストであった。実際のところは、王の関与は様々な点で大きかったのではないかな。そもそも、なぜここでバンテアイ・スレイだったのか。この寺院は王室寺院ではない。また、その有名な赤砂岩の色も、独立記念塔は当初はグレーだったことを考えると、理由として挙げることはできない。なぜ、アンコール・ワットではなかったのか。

他に、グレー・ビルディングのスカイラインは、ニューヨークの摩天楼がインスピレーションの源になったと、モリヴァン自身が告白している。建築家のデザインソースは、それこそ自由なものである。やはり、本書の記述は、あまりに建築家にクメール民族を背負わせすぎたのではないだろうか。

創造する主体としての建築家モリヴァンは、どのように建築を捉えていたか。著者はひとつの図式を用いて説明している。そこでは、伝統建築の近代化と近代建築のクメール化が対比的に示されているが、併せてインド建築のクメール化、西洋古典建築の近代化も組み込まれている。ただし、

本文ではインド建築（インド文明ではなく）のクメール化については何らの説明がない。かつて蘭領東インドの建築家は、ジャワの古代建築をインドから伝播したものとして切り捨てたが、モリヴァンは、造形のクメール化をどのように考えていたのだろうか。かたや、西洋古典の近代化についても、彼はどのようにみていたのか、もっと突っ込んだ分析が欲しかった。これは、創作の三段階で示されているような、時系列上の彼のデザインの変化と直結する問題である。彼のデザインが折衷から抽象へと進んだのなら、では彼はモダニズムの出現をどう捉えていたのか。彼の学んだ頃のエコール・デ・ボザールは、まだまだ歴史主義の残り香が強かった可能性が高い。彼のコルビュジェ理解も、当初は皮層的に留まっていたかもしれない。もっとも、ピュアなモダニズムなど、それこそユートピア的なもので、現実にはどこにもありはしない。モリヴァンは、それを体現した人であったといえるだろう。

著者の創出したモリヴァンのイメージは、具体的に豊かなものであった。そのストーリーテリングは、よくデザインされているだけに、別の角度からみたとき、彼の業績はどう評価されるか、その点も気になる。本書でも、比較事例を度々挙げて、その位置付けを示しているが、スリランカやベネズエラの事例は、同時代性を裏書きしてはくれるが、モリヴァンの相対化までは届いていないだろう。南ベトナムのゴー・ヴィエト・トゥやタイのスメート・ジウムサイといった建築家たちとは、モリヴァンは何が違ったのだろうか。そうして、対象の相対化のためには、史料批判がもっと必要である。本人の言に隠された真実を暴く作業は、もっと丁寧に行うべきである。

本書を読んでいると、著者自身がモリヴァンに心酔している様がよく伝わってくる。が、それは、単なる対象への愛に留まらず、対象への自己投影が込められてはいないか、というのは評者の穿った見方だろうか。著者もまた、建築設計と研究を手掛ける多才な人である。対象を描き出すためによくプランニングされている、という意味において、本書は、やはり建築家を書いた本だとは思ふ。そうして、本書は、だからこそ、読者を惹きつけ

るストーリーを持ちえたといえよう。読者は、著者のデザインしたプランに従って歩を進めればよいのだから。今後、著者はどのように自らの行路をデザインしていくのだろうか。著者のさらなる活躍に期待したい。

（大田省一・京都工芸繊維大学デザイン・建築学系）

中辻 享、『焼畑を活かす 土地利用の地理学——ラオス山村の70年』京都大学学術出版会、2025、vi+408p.

焼畑は東南アジアの各国政府によってこれまで森林減少の元凶のひとつであるとされてきた一方で、研究者のコミュニティにおいて焼畑は森林環境に適した農業形態であるという評価がある。本書は、こうした意識の違いの背景に焼畑の定義の違いや焼畑の評価に乖離があるためだとし、こうした乖離がどのように生じているのかを明らかにしようとしている。非常に厚みのあるデータから着実な議論が展開されており、全般にわたって説得力のある内容となっている。ここではまず本書の内容の説明から始めたい。

本書で用いられた方法論は2つに分かれており、これに対応した構成になっている。一つ目は2000年代以降の焼畑民の土地利用を同時代の現地調査から明らかにしようとするものであり、第1部「国家政策の影響とラオス焼畑民の対応」（第3章～第6章）と第2部「焼畑民による家畜飼養」（第7章～第9章）がこれにあたる。もう一つは過去から現在までの焼畑民の土地利用の変遷とそれが森林に与えた影響を1945年以降に撮影された航空写真を用いて明らかにしようとするもので、第3部「長期的な土地利用・土地被覆の変化」（第10章、第11章）がこれにあたる。なお、第12章は本書全体をまとめる総合的な記述となっている。

第1章の序論では、本研究の対象である焼畑が、近年減退しているということについての問題性を扱っている。まず焼畑減退の事実と、それを引き起こす主な要因として森林保護政策、大規模農業開発を進める政策、市場向け活動の展開があげられる。焼畑の減退によっておこる問題として、焼